

地理学思想の比較論的展望

デービッド・フーソン

- | | |
|-------------|------------------|
| I はじめに | V ソビエト連邦の地理学 |
| II 地理学の現状 | VI アメリカ合衆国の地理学 |
| III 地理学の国際化 | VII 地理学の多中心化にむけて |
| IV “西洋”の遺産 | |

I はじめに

筑波大学人文地理学研究に寄稿できることは、私にとって誠に光栄なことである。本稿は、1985年に私が筑波大学において行った講演とそれにひき続くディスカッションに基づいたものである。筑波での講演は、私の本拠地であるカリフォルニアのバークレイを一時離れて、約7か月間にわたってヨーロッパ各国、ソビエト連邦、中国を旅行し各地で講演を行ったあと、最後の訪問国である日本に到着して間もなく行ったものである。この長期間にわたる有意義な旅行は、国際地理学連合と国際科学思想史連合の共同プロジェクトである地理学思想史ワーキンググループの委員長としての私の仕事を兼ねて行ったものである。旅行を終えて私が実感したのは、多くの事柄を学んだことはもちろんのこと、世界における地理学思想の全体像を、以前よりはるかにバランスよく理解する事ができたということである。

私にとって最も重要な意味を持ったのは東アジアにおける滞在であり、その古くからの地理学の伝統と、世界において再び重要性を増しつつある中国と日本とを体験できたことであった。すでに私はかなり多様な経験をしてきた。というのは、大英帝国がいまだに健在であった時代にイギリスで生まれ教育を受け、インドとその周辺地域が植民地であったところにそこで1~2年を過ごしたことがあった。過去30年間は、北アメリカ（そのうち5年はカナダ）で生活してきたが、幸運なことに、1950年から60年にかけての激動の時代に、ソ連に関する地理学の専門家としてワシントンDC地区にいたことができた。まさにこの時期にソ連はスプートニクを宇宙に飛ばし、合衆国さえ追い抜きえるダイナミックな再生超大国として世界の関心を集めていたわけである。それ以降、私は繰り返しソ連を訪問し、特にその地理学思想の発達について研究を行うことになった。ついで過去4分の1世紀の間、私は北アメリカの太平洋岸に居を構えてきたが、この間、世界の重心は大西洋から太平洋へと著しく移行し、こうした流れの中で日本はきわめて重要な存在となってきた。このような状況にもかかわらず、太平洋地域、特に中国と日本を、地理学史および地理学思想に関して、独立した重要な存在として考える必要性を痛感するようになったのはごく最近のことである。

本論文においては、1) すべての国において強い地理学が必要であること、2) 過去30年余りにおける学問としての地理学の国際化とそれに伴う言語上の英語化、3) “西洋”の遺産の性格、4) ソ

連とアメリカの地理学の特徴、5) 地理学思想における北大西洋地域の覇権を排除し、その世界化と真の多中心主義が必要であること、これらの諸点に関して簡潔に論じてみたい。

Ⅱ 地理学の現状

地理学の価値と役割に関する理解は、世界において驚くほど不均一である。国民の生活や思想の中で、地理学が確固たる地位を持ち、高い評価を受け、重要な役割を果たしている国もあれば、ほとんどその存在感のない国も多くある。

このような現状を考えると、われわれが自分自身のために答えを出さなければならず、しかも他の学問領域の研究者や一般大衆に対して伝えなければならない問題は、まことに単純なものである。それは、もしも地理学が存在しなければどうなるであろうか、そして、ほぼ世界的に財政事情が悪化しているなかで、どうして地理学は社会制度によって維持される必要があるのであろうか、ということである。地理学の存在が不確実な今日状況の中では、地理学を職業としているわれわれでさえ、そしていくら地理学が好きでも一生の職業を決定しなければならない学生にとってはなおさらのこと、機会があれば地理学よりも社会的に認められている隣接の分野へ移ることはいとも簡単であることだ、私も承知している。ある学問分野の現在および将来の価値に確信が持てなければ、その歴史を研究しようという意欲を起すことは明らかに難しいので、われわれの国々や世界を理解することが、いつにもまして今日必要不可欠であるかについて、私が個人的にどのように考えているかを少し述べておきたい。明らかにいえることは、経済発展、都市化、交通と通信、人口増加、そして究極的には地球を破壊するような力といったものに影響を及ぼす技術の著しい変化によって、伝統的な世界的規模での統合的な地理学的思考方法がこのうえもなく不可欠となっており、こうした考えかたは、自然と人間、都市と農村、過去と現在、地方と世界というように、物事を総合的にとらえるものである。しかしながら、このような事象間の相互依存性が明白で必然的なものとなっているにもかかわらず、学問的な動向を見ると、総合性を重視したり、広い視野や統合的見方や世界観を培ったりするということよりもむしろ、専門化、分裂化、マイクロ分析が助長されてきた。

人間がわれわれの月から初めて人類の住む地球を眺めその映像を送ってきてから、わずかに10年余りしかたっていない。この歴史的出来事は、何にもまして、地球上での統一性と必然的な相互依存性という事実を、感情的にもまた論理的にもわれわれに教えてくれたといえる。このからみあった状況は、次の二つの側面において存在している。まずひとつは特定の地域における自然、人口、資源の間の関係で、これは縦の面とも呼びうるものであり、もうひとつは横の面、すなわち世界のさまざまな地域間における相互依存関係である。それほど遠くない昔、まだ人口、環境、資源という複合体に対する圧力が規模においても技術力においてもそれほど大きくはなく、また多くの地域が自給自足により存立でき、従って地球上の他の地域には大きく依存することはなくその影響を被ることもなかった時代においては、そのような考えかたはリップサービスとしか受け止められず、無視されたにちがいない。ほとんどの国において、第一の側面に関する無気味な事例はたくさんあり、たとえばブラジルにおけるアマゾン地域の開発が最もよい例であろう。国際的な側面を見ると、たとえばアメリカの

場合には、中東や東南アジアの国々の環境や文化に関する地理的知識の欠如によって生ずる損失は計り知れないものである。

こうしたあらゆる場合において、われわれの宇宙船地球号をおだやかに進めていくには、広い地理的知識と理解が不可欠なものであり、これは単に広範囲にわたる知識ばかりではなく、常に統合的に考える見方なのである。しかしながらまさに逆説的なのは、合衆国を含めたいくつかの国において、エコロジカルな地球規模での考えかたが脚光をあげだした1970年代に、時を同じくして、教育科目としての地理学の役割が低下したことである。しかし他の多くの国においては、国の大小には関係なく、地理学がよく理解され評価され、国民生活や国家の向上に役立っているのもまた事実である。

国によって地理学の役割とイメージに驚くべき差異が存在するので、このような差異がいかんにして、また何故に生じてきたのかという点に関して、われわれのワーキンググループも考えてみる必要がある。というのは、このワーキンググループは、20年近く前に当初は委員会として設立されて以来、地理学の歴史を研究することを専門にしてきた唯一の国際的な組織であるからである。

地理学者としてのわれわれの多くがそれぞれの国において今日直面している困難な状況の起源を明らかにし、ディスカッションを刺激し、われわれの問題に対する新たな理論や思考を引き出すために役立つような、いくつかの問いについて考えてみたい。というのは、まさに問題であるのは、われわれ自身の立場が個人的にも制度的にも弱いということばかりではなく、悪いことには、社会的な誤解が加わり、結局はそれぞれの国に対する地理的知識が欠如するという計り知れない犠牲が生み出されることなのである。世界市民としてのわれわれが今日直面する問題の多くがますます明白で強い地理的要素を持っており、教育を受けた人々も地理的知識と見通しを欠いているということを考え合わせると、現在の状況はまことに嘆かわしく、検討し修正を加える必要があるものである。ここでわれわれがよく理解しておくべきことは、満足しがたい状況を理解しそれを修正するためには、現在の状況がどのようにして生じてきたのかをまずはじめに把握しなければならない、ということである。各国地理学の歴史を比較研究することによって、結局は行き詰まりとなるような理論に夢中になっていること、隣接の学問分野との競争、教育カリキュラムのなかで自然地理と人文地理を統合することが明らかに難しいといったことが、強い地理学の基礎を具体化するための明らかな障害のいくつかであることを理解できるのである。そうした比較研究を行うことによって、この点であまり成功していない国が、うまく行っている国の経験からなにかを学ぶことが期待されよう。

われわれの学問は明らかに世界的な範囲と本質的に国際的な視点を持っているが、各国で展開している地理学の種類、特にその強調点とアプローチは、歴史的背景、思潮、環境、世界における“本国”の状況と地位を反映したものである。これは総合的な国家的環境であり、中心となる地理学者たちは、この中で彼らの機会を選択し、思想の枠組みをつくらなければならないのである。

Ⅲ 地理学の国際化

過去30年余りにわたって、世界経済の国際化と交通・通信・データ処理革命によって、あらゆる種類の国境を越えた活動とともに（この中で日本は顕著な役割を果たしているが）、世界は小さくなり、

国々の相互依存性は必然的に増してきた。古代から地理学は知識の普遍部門であり、概念が世界的でなければ明らかに存在しえないわけであるので、この新しく生まれた“世界システム”を歓迎し、それにうまく適応すべきものなのである。しかし、地理学はナショナリズムの盛んであった19世紀後半に制度化された後、それぞれの学者の出身国と帰属意識によって、その性格はまた変化を受けてきた。世界観はそれを見る人の立場によりおのずと相対的なものであり、また本国の持つ諸問題、環境、イデオロギーの性格も独特であるので、地理学のこうした多様性がより強化され、世界を相手にした学問にはふさわしくないようなバロキアリズムのみられることもしばしばであった。

過去40年余りの間、前述の世界規模化のプロセスに従って、地理学は、前世紀に注目を浴びたような世界を範囲とする学問へとゆっくりと戻り始めてきており、この間、北西ヨーロッパ以外の参加も着実に増してきた。こうした変化の大きさをよく示しているのは、国際地理学連合の会議が各地で開かれていることである。その創設後80年間は、開催された16回の国際地理学会のうち14回がヨーロッパで開かれた（例外はアメリカとエジプトの会議であった）。しかし、予定されている会議も含めて1952年から1992年までの40年間をみると、7回の本会議がヨーロッパ以外で開催されており、ヨーロッパにおけるものはわずかに3回である。（モスクワをヨーロッパに入れるかどうかは昔から意見の分かれるところなので、ここでは除外して考えた）。さらに、1955年にIGUの地域会議が発足して以来、この傾向はますます強くなった。すなわち、10回の地域会議のうち8回までがヨーロッパ以外の地域で開催された。1957年に日本で開催された地域会議は、アジアで初めて開かれた、地理学者による本当の意味での最初の国際会議であったといえる。

このような国際化傾向の著しい進行と平行して顕著となってきたのは、あらゆる種類の国際会議において、共通言語として英語がますます使用されるようになったことである。こうした傾向はいまだに進行中であるが、それを認識することによって、強い国際感覚を持った若くて精力的な地理学者たちは、中国人であれブラジル人であれ、またソ連人であれ日本人であれ、今後英語によってますます活発にコミュニケーションを行うことができるようになる。このような流れの勢いは変えがたいように思えるが、確かに用心も必要である。まず第一に、こうした傾向は英語を母国語としている人々にとっては誠にありがたいことであり、読む価値のあるものはすべて英語でいずれ出版されるようになると彼らは思い込むことになりかねないことである。英語圏の地理学者の視野がますます狭くなることから生ずる悪影響は、さまざまな国に存在する重要で典型的な地理学的研究の持つ個性や多様性の真の意味を、個人的に経験することができなくなることであり、そうした研究は、まさにその国に固有の問題、環境、考えかたに常に根ざしているわけである。一つの危険性は、英語で出版されるような研究は一般理論に関するものであろうし、そうした研究には書かれた国の文化的特徴といったものがしばしば排除されるということである。

特に、英語を使用する地理学者たちがフランス語を読めなくあるいは読まなくなり、従って、総ての地理学者にとってフランス語が第二言語であった時代の古典に使われたランゲージュの輝きとインスピレーションを味わうことができなくなり、また多くの独特で革新的な研究にも接することができなくなるといった時代が来れば、それはまことに残念なことであるが、そうした事態は恐らく急速に

近づいているのである。

他方、世界の英語化が進むことによって、地理学的英知の源泉と革新の中心は必然的にアメリカであるという印象が非英語圏に生ずることになれば、それは同様に悲しむべきことである。この傾向は、ノーベル賞を授与している科学の多くでは今日かなり顕著になってきているけれども、地理学に関しては同じではない。地理学は、有名大学や中等教育において地位を確立したりあるいは維持したりすることにあいかかわらず苦戦しており、地理学者たちが使ってきたさまざまな言語は、外部の人々ばかりでなく、時にはアメリカ人でさえ困惑させることもある。このような相反する傾向と必要性に対するひとつの重要な反応として、国際専門雑誌の創刊があげられる。そのよい例は、ドイツで出版されているジオジャーナルであり、これはやむをえず英語を使っているものの、重要性や明瞭度に関して国際水準にみあった論文を掲載している。地理学には、ソ連、中国、日本というようにヨーロッパの伝統とは独立して存在するきわめて重要なナショナルスクールがあるので、こうした新しい国際的な場を利用して、そうしたスクールは外国のよいものを選択的に取り入れる一方、それら独自の伝統が独特の方法で固有の問題に対して適用されているという事実を、外部の世界に対して理解させる必要がある。

IV “西洋”の遺産

近代的な制度化された学問としての地理学は、第一次世界大戦前の40年ほどの間に西ヨーロッパにおいて誕生し形成されたということに疑いはない。この近代地理学が基礎にしているのは、2千年以上前に地中海地域で存在した地理学であり、当時ギリシア人たちは、実態を観察、測定、蓄積することによって、居住可能な世界および人間と自然の相互関係に関する哲学と仮説を作りあげた。このような地理学的知識と作成された地図は、ギリシア・ローマの支配力と文明が衰退した後も千年にわたって修正を受けながらも生き続け、その後地中海西部へと重心が移動するにつれて再び活性化し著しい拡大をみせたが、ここではルネッサンスの気運の中で大航海時代が始まり、世界観が急速にそして大幅に拡大することになった。この時までには、中国およびイスラム世界においては大探検と地理学がほとんど衰退してしまっており、それ以来地理学は、探険的なもの、文芸的なもの、科学的なものすべてにおいて、西ヨーロッパを中心に展開されるようになった。

地理学における一般的に科学的な見方は、18世紀末期に、クック船長による太平洋の航海に引き続いて顕著なものとなったが、この航海は世界の正確な輪郭を最終的に明らかにしたばかりでなく、自然・人間界の諸現象を観察し体系化するといった動きの始まりをなし、比較研究の方法を導入したものであった。続いて、クックの航海から帰ったばかりのゲオルグ・フォルスターやリッターの比較地域地理学から影響を受けたフンボルトは、熱帯アメリカにおいて画期的な科学的探険旅行を行い、これは19世紀を通じて学問としての地理学がドイツによって大はばに方向づけられるということを確定するものとなった。1870年代以降、地理学の制度化がまずドイツにおいて行われ、そのあとすぐにフランス、イギリス、西ヨーロッパ各国において、そしてさらにアメリカ合衆国や日本で進んだ。それぞれのナショナルスクールは異なった歴史的経過の中で生まれたので、強調点や思想に差異がみられ

たのは当然のことであったが、北西ヨーロッパの地理学者たちの間には共通する目的が存在した。特にフランスは最も特徴ある地理学を発展させ、1930年代までには、ナチ影響下において地理学の役割が低下していたドイツとは対照的に、世界の地理学の中で主導的な役割を果たしたといつてよい。世界で最も多くの地理学会が開催されてきた都市はパリであるということが、このことを示している。過去四半世紀の間、アメリカやイギリスへ、そして一部スウェーデンへとその重心は移動してきたように思えるが、これは先に述べたような言語上の傾向とともに、そうした地域における一連のいわゆる革命と“新しい地理学”の発達によるものである。

好むと好まざるとにかかわらず、“西洋”という概念は世界中の人々の心の中にしっかりと刻み込まれてきており、今後もしばらくの間は存在し続けるであろう。多くの地理的用語がこのようにして生まれており、“中東”や“極東”がよい例である。“西洋”という概念が高度な“発展”、福利、成長といったものと同じのものとなされ、“価値”とも不明瞭ではあるが関係しているものとされればされるほど、そうした概念は地理的にますます拡散するようになった。もっぱら“東洋”の伝統を持つ日本は、“西洋世界”の名譽会員として選ばれることに同意するものであろうか？

この地域を世界の中で正確に定義しようとすることはなほだばからしいことではあろうが、多くの“よそ者”にとっては、これはいまだにたいへん意味を持っている。ロシア人もそうした仲間であり、彼らは長い間、“西洋”というものを称賛したりあるいは非難したりするが、明らかに距離を感じる存在としてみなしてきた。普通は西ヨーロッパもまたロシア（あるいはソ連）を西洋の一部として、あるいはヨーロッパの一部としてもみなすことはなく、これに対してポーランドはそれに含まれることが多い。国それ自体と同様に、ソビエト地理学の特異性は、ロシアの伝統、国土の非ヨーロッパ的な規模と環境、そしてマルクス主義から生じたものである。このような点では中国の立場はもっと明瞭であり、過去一世紀余りの間、西洋の伝統や影響についてはよく認識してきたものの、それからはさらに距離をおき、西洋の考えかたを取り入れることにも二重意識をもってきた。一方日本は、驚くほど急速に西洋から多くを吸収したが、それにもかかわらず、総じて伝統的な文化を保持し続けている。これらの国はいずれも過去半世紀の間に危機を経験しており、それは他の国々と同様に、地理学の研究にとっては著しい後退をもたらすものであった。しかしながら、こうした国家的混乱期からの回復によって独創的で時には情熱的な地理学改革の波が生じ、こうした流れの中で、過去に繁栄した伝統の復興もしばしばみられた。

V ソビエト連邦の地理学

日本においては、ソ連における地理学の歴史よりもアメリカ地理学の歴史のほうがはるかによく知られているであろう。これら二つの国には、政治体制は別としても、歴史、環境、発展、超国家的規模といった点で共通するところも多くあるので、それらの地理学を比較する価値はあると私はずっと考えてきた。全く異なった規模、特性、文化を持つ日本はこれら二国の間に位置しており、結局は両者を考慮できる立場にあると同時に、両国は日本についてさらに学ぶ必要がでてこよう。

ふり返ってみると、1950年代中頃から1960年代中頃にかけての時期は、第二次世界大戦以降のソビ

ソビエト地理学思想史における大きな分岐点であった。この時期は、アメリカおよび“西洋”の地理学においても同様な分岐点と一般に考えられる時期、すなわち、いわゆる計量革命あるいは理論革命の時期にほぼ一致するものである。しかしながら、両者はともに地理学の理論的および方法論的な方向を大きく変えることを宣言し、激しい論争と意見の分極化を伴うものであったけれども、両者の性格は根本的に異なっていた。

明らかに異っていたのは、アメリカでの“革命”は技術や方法論的な問題を中心としたものであり、土着の伝統の復興には大きな意味が存在しなかったことである。一方ソビエト地理学の変革期においては、技術的な面よりも哲学的で価値に関するものを中心に置かれ、またソビエト以前のロシア地理学の失われた伝統や精神といったものの復興を熱望するものであった。

このようなソビエトにおける“復興”の背景に存在した原動力を理解するには、英語圏の大学には地理学の組織がいまだになかった1880年代初期に、ロシア地理学に何が起きていたかを振り返って見る必要がある。このころペトログラード（現レニングラード）大学の V. V. ドクチャエフは、『ロシアの黒土』¹⁾の研究を出版しており、これは土壌の形成と分類に関する基本原理を根本的に変えるものであった。時を同じくして同大学の A. I. ヴォエイコフは『世界の気候』²⁾についての大作を出版しており、これは熱収支および水収支という中心概念を導入するとともに、自然に対する人間のインパクトに関する研究の始まりをなすものであった。D. N. アヌーチンは、モスクワ大学に地理学部を創設しており、今日これは世界最大の地理学部である。評判もすこぶる良く成功していたロシア帝国地理学協会の指導者であった P. P. セマノフ・テンジャンスキーは、『ロシア帝国地理統計事典』³⁾の最終巻を完成していた。彼の幅広い興味と影響力は、テンジャン山脈において最初の探検を行うとともに、農奴解放への戦いを先導し、皇帝から勲章を受けたり、ほかならぬカール・マルクスからその研究業績が評価されたりしたといったことからうかがえる⁴⁾。このような、あるいはそれらに関係した方向での研究は、ロシア帝国時代ばかりでなく、ソビエト時代に入っても最初の10年近くの間は速やかに進行し、地理学の他のナショナルスクールに匹敵するほどの豊富で多様な業績が生み出された。一世紀余りに生れ、今日もいまだに重要であるこうしたロシア学派の特徴として、次の点があげられる。

- 1) 自然環境の機能的で統合的な研究方法がみられ、その中心をなすのは自然的な地帯構造や熱収支・水収支といった生物気候学的な諸概念である。
- 2) 自然が人間に及ぼす影響よりも、自然に対して人間が与えるインパクトにより注目が注がれており、また特に農業を目的とした自然保護的な改良計画が重要な意味をもっている。
- 3) 自然現象および人文現象を統合した地域的アプローチ（これは“景観”学派と“地域”学派をともに含んだものである）がみられ、応用目的のための“地域計画”への関心が強い。
- 4) 国土（および天然）資源についての地図や地図帳を作成する長い伝統や、小農民の状況を改善するために頻繁に行われてきた計画によく表れているように、愛国主義と利他主義が共存している。

これらのすべての点に関して特徴的なのは、全般的アプローチにおいては今日存在するほかのナショナルスクールとは著しく異なっているものの、過去においても現在においても、マルクス主義の原理とは決して矛盾するものではないということである。

このことは、先に述べた1950年代後半から1960年代初期にかけての“革命”へとつながった、多くのソビエト地理学者が持っていたフラストレーションを、かなりの部分説明している。というのは、四半世紀におよぶスターリン時代を通して、ソビエト地理学は、ほかの多くの分野と同じように、認識されない存在となってしまうていたからである。地理学者の数は大幅に増加したが、彼らのほとんどが狭い専門分野の教育しか受けておらず、目前にある実用的な仕事へと動員された。1950年代初期までには、地理学はほぼ完全に自然科学と見なされ、自然地理学者による新しい官僚主義の支配を受けるようになっていた。こうした自然地理学者たちは、自然研究と人文（経済的）研究はきわめて別個なものであるべきで、ロシア地理学の伝統の根本をなしていたような両者の統合的な研究を行うことは非論理的である、ということを公言していた。

1960年ごろに起こったソビエト地理学の“復興”に伴って生じた悔悟の大きさを説明するために、ソ連の外ではいまだにあまり知られていないこうした歴史の概略を述べることは必要であるように思える。自然および人文現象の統合的な研究を復活させ“正統化”することへの動きは、1960年に出版されたアヌーチンの『地理学の理論的諸問題』⁵⁾によって特に顕著なものとなり、数年に及ぶ活発な論争を経て、提案された改革は党によって正式に承認され、地理学の権威組織によって採用された。しかし、実際には後者は提案された改革を徹底的に実施することはなく、1983年には、こうした改革の欠如に対する鋭く権威のある批判が、党の機関誌である『共産党』に新たに登場した⁶⁾。確かに過去20年にわたって幾らか向上はみられてきたけれども、それはゆっくりとしたものであり、研究、教育、出版活動の多くがいまだに自然地理学の分野で行われ、研究における大学の地位は低いものであった。しかし近年、きわめて重要な役割を果たす科学アカデミーの地理学研究所に、30年余りぶりに新しい所長が誕生し、ソビエト連邦全体における新しい主導體制の確立とともに、適切に近代化された特徴あるロシア地理学の伝統に沿って、独創的な研究の復活が大いに期待されるものであり、これは世界における地理学思想を発展させるものとなろう。

IV アメリカ合衆国の地理学

19世紀後半における成長著しいアメリカ合衆国は、“フロンティア”の幻想と現実、人口の西漸運動、そして大陸の運命とによって支配されていた。解放的な生来の楽観主義は、“アメリカ精神”や無限の機会と自由に対する信仰といったものに典型的に見られるが、これは“荒野”とか“アメリカ砂漠”といった悲観的なイメージと、時には交互に現れるものであった。南北戦争、ホームステッド法の制定、そして大陸横断鉄道の建設に続く新しいナショナルリズムのうねりの中で、観念も現実ともに流動的であり続け、大陸西部の地域は、骨の折れる試行錯誤によって発見されあるいはしばしば誤って理解されていたし、また利用されたり乱用されたりしていた。東部における都市の急速な発達にもかかわらず、国全体としては圧倒的に農村的であった。アメリカのフロンティア現象は1890年代に終了したとされたが、それは不滅で活力と企業心に富んだアメリカ社会とアメリカ人の性格を生み出すものとして認識されていた⁷⁾。

人間は自然を“征服”し、改変し、服従させる存在と見なされ、国家の歴史の主要なテーマは豊か

であると考えられた広々とした土地を植民開発することであるとされた。基本的には楽観的で、しばしば多幸症的であったり尊大であったりもする思潮の中では、環境が人間を支配するというよりはむしろ自然に対する人間のインパクトに焦点を当てたようなアカデミックな地理学の発達が期待できた。しかし実際には、19世紀末期の制度的なまた職業的なアイデンティティを反映して、主に関心が注がれたのは地形の形成そのものや、人文現象に対する環境の“影響”といった点であり、これらは読者を喜ばせ、時には魅了することさえあっても、単純過ぎる言明や一般化や思考構造に満ちていた。興味深い問題は、どうしてほかの国に比べようもないほどにこうした形で地理学が定着したのであろうか、どうしてそのような地理学はたいへんに人気があり継続しえたのであろうか、そして地理学の独特な偏向を促進した19世紀アメリカの生活と思想の歴史的そして環境的な背景はいかなるものであったのであろうか、ということである。

このような地理学は、積極的な楽観主義と自然に対する無限の力とに対する、気まぐれで潜在意識的な反応とも考えられよう。アメリカ大砂漠やその他の手におえない障害についての冷静な衝撃や予言は、そうした思想の普及や勢いに貢献したのかも知れない。特に西部への入植に終りをもたらずような大きな自然障害物や、現実に対する一般的な認識の増加によって、環境決定論的な信仰を受け入れやすい風潮がつくりだされた。これに加えて、アメリカ合衆国における初期のアカデミック地理学において指導的役割を果たすことになった W. M. デービスと R. D. サリスバリーは、ともに地質学者であった。従って、彼らの興味の中心は地形それ自身にあったので、原因と結果という思考方法によって、当然のことながら地形を第一の対象として行われた環境的影響の論理的な研究が、人文現象を地理学的に研究する場合にも当然の方法であると彼らが確信したのももっともなわけで、彼らは実際そうした人文現象にはほとんど興味を持っておらず、また個人的には研究を行ったこともなかったのである。デービスが地形学的輪廻や環境論的説明において自由に行ったように、ダーウィンを援用することは簡単なようであった。もっとも、パウエル⁸⁾ やシェーラー⁹⁾ といった先駆的な地質学者たちは、人間活動に対してダーウィニズムをそのまま適用することは避けており、彼ら、特にパウエルは、そうした人間活動にますます興味を持つようになって行った。しかし、第一次世界大戦前のアカデミック地理学の精神と実践は、取り違えられた進化論と環境決定論とによってまさに支配されており、デービスばかりでなくセンプルやハンチントンがそのよい例であった。このような環境論はその後地理学会によって放棄されてしまい、そうした思想が組織的に継続したほかの国（これにはロシアも含まれており、政治体制が完全に变革されたにもかかわらずそうであったのであるが）とは状況が異なっていたので、これはアメリカの地理学と地理学会がいまだに苦慮している、混乱した社会的イメージと制度的な弱体性を部分的に説明するものであろう。アメリカ合衆国における制度化したアカデミック地理学は地質学から生まれたという事実は、初期の発展にとってはきわめて重要であり、歴史学から成長したフランスの地理学とは特に著しいコントラストをなしている。このような状況の結果として生じたのは、1950年代に極に達した自然地理学の“反動的”な衰退であり、あらゆるものを環境の影響とみなす、不必要なまでに臆病なアプローチであった。

こうして、一連の失望や行き詰まった理論や、また「風呂のお湯ごと赤ん坊を放り投げる」といっ

たふうな反動が絡み合って、1960年代にはいわゆる計量・理論革命が起こった。ここで導入された技術や理論の多くが有用であることは否定されるものではないが、バランスの点では、この革命はアメリカの地理学にとって同様な後退であったと私は考えている。アメリカ合衆国の多くの地理学部では、主に経済的社会的な統計資料を用いた細密な空間分析に専念するようになり、地誌学、歴史地理学、文化地理学や、まだ存続していた自然地理学といった分野における価値ある多くの研究を、すみやかに批判し放棄してしまった。こうした流れの中で、地理学部は孤立的で狭小な存在となっていたが、これは一部には、信頼できる統計の存在する“超先進国”に研究が限定され、単純な“最適”解答が求められたからであった。地域的環境や人文的特徴と多様性の消失、歴史のおよび生態学的プロセスの無視、文筆能力の著しい減退によって、アカデミックな地理学は一般の教養社会から遊離してしまった。結局は、大理論の探求は幻想に等しく、機械論的そして実証主義的なアプローチが浅薄であることが理解されるようになり、こうした傾向に対する反動が必然的に始まった。このようにして、人文主義的な、行動論的な、また生態学的なアプローチが幸いにも復活し、幅広い自然地理学の回復が見られ、また社会科学的地理学も復活した。しかしながら1970年代には、小規模で排他的なイングループが乱立し、それらは主に内輪同士で会話を行い、多分に主観的であり、時には反啓蒙主義的でさえあったし、また現実世界が抱える諸問題への適用性を欠いていた。こうした中で、過去20～30年にわたってアメリカ合衆国のいくつかの有名大学から地理学が完全に排除されてしまい、こうした事態が起こったのは先進国の中ではアメリカだけであったが、一方、高等学校のカリキュラムからも地理学はほとんど姿を消してきている。アメリカ地理学の国家的伝統に対する関心は全く存在しないし、崇拜の念はさらに見られない。地理学の多くの分野において、前述のように質の高い研究が行われてはいるけれども¹⁰⁾、最近のアングロアメリカ地理学に関する展望論文では議論されないことが多く¹¹⁾、そうした考察は主に方法論的および哲学的難題を解くことに焦点をおいているのである。

Ⅶ 地理学の多中心化にむけて

日本の地理学は、第二次世界大戦中の打撃から驚くほどの回復をみせて以来、独自のスタイルと独特の内容を発達させてきており、たとえば歴史地理学のような固有の伝統に新たな関心を示している¹²⁾。さらに、英語出版物の情報に通じたりそれらを日本語に翻訳することにも、時には出版時までには時代遅れになっていたりあるいは放棄されていたりするかもしれないが、かなりの努力を払ってきた。

一方、日本には地理学者の数や地理学的出版物も多く、また最近では英語で発表する努力もなされてきたにもかかわらず、日本の地理学者の業績は外国では比較的知られていない。これはほとんどの地理学者が日本国内で研究を行ってきたためであるように思えるが、このために外国からの関心を引き付けることができないとは決していえない。日本を対象とした研究自体、その独特なスタイルや方法を公にし、それらが日本古来の伝統から派生したものであることを論証するための適当な手段となるのである。他の学問分野においては、日本は、模倣的であるよりもむしろ真に革新的な業績でますます知られるようになってきており、地理学が例外とならなければならない理由はどこにも存在し

ない。1980年および1984年に私が日本に滞在してみて印象深かったことは、日本の地理学者の持つ知的な好奇心、関心の範囲、専門知識、そして自信であり、そうしたものに基づいて、日本の地理学者がもっと多くの重要な事柄について語ってくれることを今後期待している。例えば、世界のほかの地域における地理学の諸相に関する日本人の解釈や、世界の空間経済や政治地理学や世界の都市化についての日本人の分析が英語に翻訳されれば、まことに興味深いものであろう。

中国人は、文化大革命という混乱のあと、活力と想像力をもって独自の地理学の再建にとりかかり、前世紀まで存在した中国地理学の豊かな伝統との接点を求め始めており、また彼らのかかえる問題に適合したような現代的な概念を発達させ、外の世界の思想にもオープンになっている。例えばこうした中国における地理学の発展を日本人はどのように評価しているのかは、彼らの西洋地理学に対する批評とともに、大いに興味深い点である。

日本ばかりではなく、アメリカ人が何をしているかをあまり夢中になりすぎることなく肩越しに眺めながら、国家的伝統や特殊な需要と優先事項に調和した独自の地理学を発展あるいは復活させつつあるような国々にとっては、現在は良い時期であると言えよう。とりわけ日本人は独自の畑を勤勉に耕すべきであり、他の国の思想を輸入する場合と同じように、自信をもって独自の思想を輸出できるようにしておくべきである。アメリカ地理学は、できる限りの援助と助言を必要としているのである。長い間続いてきた“西洋”の覇権にかわって世界における地理学思想の真の多中心構造の発展する時期が、今まさに熟そうとしているといえよう。

(翻訳：矢ヶ崎典隆)

注・参考文献

- 1) V.V. Dokuchav (1948) : *Russkii Chernozem in Izbrannyi Sochineniia*, 1, Moscow.
- 2) A.I. Voeikov (1884) : *Klimaty Zemnogo Shara*, St. Petersburg (translated as *Die Klimate der Erde*, Jena, 1887).
- 3) P. P. Semënov Tian-Shansky (1863-83) : *Geograficheskoi-Statisticheskii Slovar Russiikoi Imperii*, 5 volumes, St. Petersburg.
- 4) e. g. Yu G. Saushkin (1953) : "Rabota Karla Marksa nad trudami russkogo geografa P.P. Semënova Tian-Shanskogo." *Voprosy Geografii*, 31, Moscow.
- 5) V. A. Anuchin (1977) : *Theoretical Problems of Geography* (English edition edited by G. Demko and R. Fuchs, with an introduction by D. Hooson), Columbus, Ohio.
- 6) N.T. Agafonov, V.A. Anuchin and S.B. Lavrov (1983) : "The Present Tasks of Soviet Geography," in *Soviet Geography: Review and Translation*, 411-422.
- 7) F. J. Turner (1920) : *The Frontier in American History*, New York.
- 8) J.W. Powell "Darwin's Contribution to Philosophy," *Proceedings, Biological Society of Washington*, 1, 60-70.
- 9) N.S. Shaler (1984) : *Nature and Man in America*, New York, 185-213.
- 10) e. g. M.W. Mikesell (1984) : "North America," in P. Claval and R.J. Johnston, *Geography since the Second World War*, Lonon, 185-213.
- 11) e. g. R. J Johnston (1983) : *Geography and Geographers*, 2nd ed., London, and M. Billinge, D. Gregory and R. Martin eds. (1984) : *Recollections of a Revolution*, London.
- 12) e. g. K. Takeuchi ed, (1984) : *Languages, Paradigms and Schools in Geography: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought (2)*, Tokyo, and K. Takeuchi in Claval and Johnston, op. cit., footnote 10, 235-263.

Geographical Thought in Comparative Perspective

David HOOSON

This paper is partly an outgrowth of my experience as Chairman of the International Working Group on the History of Geographical Thought and, in particular, a lengthy journey through Europe, the Soviet Union, China and Japan in 1984-85. It arises from a growing conviction that geography is inevitably becoming more internationalized, along with most other aspects of our lives, and that therefore this needs to be reflected in the recognition of a new "polycentrism" in Geographic Thought.

It begins with an affirmation of the need for a strong geography in all countries today, because of all the problems which increasingly have taken on a vital geographical component. Some countries show a much greater understanding and recognition of the value of geography in education and in public affairs than others. Our international Working Group is interested in finding out how and why these differences have come about, and how the less fortunate among us can learn from the experience of the more successful.

The rapidly growing internationalization of geography in the post-war period is noted, particularly through the dispersion of the International Geographical Congress beyond Europe -- and alongside this, the increasing role of English as the international medium of exchange of ideas. This is followed by a description of the "Western legacy" in the history of geography, overshadowing other cultural traditions.

The geographical traditions of the Soviet Union and the United States are then analysed in some detail and compared. Pre-Soviet Russia had built up a rich and varied tradition especially in integrated studies of the natural environment and the humanized landscapes, equal to any other "schools" at the time. But in Stalin's time geography became transformed into a largely physical science and the vigorous reaction to this situation came with the Anuchin revolution around 1960, which aimed at restoring the broader, humane, integrated type of geography from the pre-Soviet traditions.

In the United States, by contrast, the so-called Quantitative Revolution -- about the same time -- was primarily technical and theoretical and did not in any way hark back to earlier American traditions, which had been rejected. There has similarly been a reaction in the United States towards more ecological, behavioral and cultural approaches, but the last decade or so has seen the introduction of a confusing plethora of different philosophies and methods often displaying a lack of application to the problems of the real world and rather difficult to understand, even in English.

Finally, while noting the progress and originality of Japanese, and also lately the resurgence of Chinese, geography, I expressed the wish for more confident, "non-Western," National Schools in world geography. I hope that Japan, along with other countries that are developing or rejuvenating their own national geographies in line with both national traditions and specific needs and priorities, will feel able to do so without looking too anxiously over their shoulders to see what the Americans are doing, and to export its best contributions. The time seems

ripe for the evolution of a genuinely “polycentric” structure of world geographical thought, to gradually replace the long-time hegemony of “the West.”